

■ 散歩道 ■

1億2千万人の重み

大 橋 秀 雄

東京大学工学部機械工学科は、工部大学校時代から続いてきた古い学科で、その名譽教授室には、歴代の教授が残してゆかれた古い資料がたくさん眠っている。ジェームス・ワットが愛用したと伝えられている丸縁眼鏡のような収集品を始めとして、書棚には、明治の時代に活躍された先生方が学生時代に書き留めた講義ノートや、教える側になってから使った講義草稿ノートの類が並んでいる。それらのノートを開けるたびにいつも感嘆することは、ページ一杯をびっしりと埋め尽くしている手書きの流麗な横文字である。

おさまりに漏れず、機械工学教育の基礎も外国人教師により築かれた。東大本郷キャンパスの工学部1号館前庭にあるウェスト先生 (Dr. C.D. West) の胸像がその歴史を物語っている。英国グラスゴーから来日されたウェスト先生の講義を聴きながら、当時の学生はそれをすらすらとノートに書き留めていたのだろう。

ウェスト先生から直接教えを受けた学生が教える側にまわる頃は、おそらく日本語に英語の専門用語を交えた折衷語で講義がされたことだろう。やがて専門用語の日本語化が進み、日本語の教科書や参考書・専門書が現れるに従って、講義の完全日本語化が次第に定着してきたと思われる。

韓国科学技術大学の研究室を訪れたとき、大学院生の机の前に並んでいる本のほとんどが英文の専門書であることに気付いた。それに比べて、私の研究室の学生が身近に置く本は、ほとんどが日本語であった。

日本と韓国の機械学会は、隔年に共同主催のシンポジウムを開催している。会議用語は英語である。発表論文の質的内容は別として、討論の時間になると、日本勢は少数の例外を除き俄然守勢に立たされることが多かった。韓国の研究者の大部分はアメリカで

大学院を終えており、語学力において格段のハンデがあったのである。

明治以来営々として築き上げてきた教育の自立と自給態勢が、ここにきて逆の影を投げかけ始めたように思える。1億2千万人、この人口に支えられた市場の大きさが、あらゆる情報を日本語化するのを可能にしてきた。高等教育は勿論、最先端の研究までが自国語で済む国。そしてその国語が、学術共通語としての英語から全く隔絶している国。考えてみれば、この1億2千万人の重みが、日本語による自給自足を可能にし、その反面として外部世界との壁を高くしてきたのである。

21世紀は、人や情報がボーダーレスに動き回る時代である。学生の就職先や勤務地、また必要とする資格や免許も、日本の枠を超えて世界に広がりつつある。また研究評価機関としての学協会の役割も、日本語に固執する限りやがて地域の親睦団体に転落せざるを得ない状況に置かれている。若者が歌うカラオケにも、英語のせりふが入るのが当たり前になったのである。

日本の高等教育は、ボーダーレスの時代に、日本語の枠を超えて活躍する人材を育てるという視点からは全く無策であった。英語のハンデのないアメリカですら、グローバルエンジニアを如何に育成するかという議論が熱を帯びている。明治の時代にフィルムを巻き戻す意図は全くないが、この教育上の弱点をカバーするにはどうしたらよいか、是非一緒にお考え頂きたい。

おおはし・ひでお (1931年生)
工学院大学学長、日本学術会議会員、東京大学名譽教授、東京大学卒、Dr.-Ing., 工学博士。
研究課題：ターボ機械の動特性／ターボ機械の二相流特性／排気ガス拡散。受賞：日本機械学会賞論文賞 (4回)／藍綬褒章。